京都府立大学学術報告（人文）第 75 号　（2023 年 12 月）

イマヌエル・カントの人間観に対する当事者批評

横　道　　誠

0. はじめに――本論文の課題
1. 人間、人間学、新しい人間
2. カントの自閉度、あるいは自閉的傾向について
3. 宇宙と霊界を思う人
4. 批判哲学と能力心理学の人
5. 自律的自由、大学の自治と学問の自由の人
6. 社交、食事、嗜好品、自然美を愛する人
7. 世界市民
8. 老耄の人
9. おわりに――「人間」の終焉と「超人」

0. はじめに――本論文の課題

本論文の課題は、ドイツの哲学者イマヌエル・カント（1724 ～ 1804 年）の人間観に焦点を当てて、「当事者批評」を遂行することにある。当事者批評とは、疾患や障害の当事者が著作や創作物、創作者の生活史や周辺情報の解釈をつうじて、じぶん自身の世界観を立ちあげる批評のことだ。筆者は自閉スペクトラム症（ASD）の診断を受けており、その筆者から見てイマヌエル・カントには同質性が感じられることが主題となる。

1. 人間、人間学、新しい人間

フランスの思想家ジャン＝ジャック・ルソーは、社会契約説の提唱者のひとり、フランス革命の理論的起源のひとり、人間性の発端に迫った『人間不平等起源論』、『言語起源論』、『エミール』などの著者、18 世紀最大級のベストセラー恋愛小説『ジュリ――新エロイーズ』の著者と

して知られる。童謡『むすんでひらいて』を作曲するなど、音楽家としての顔も備えていた。その仕事の幅の広さと与えた影響の大きさに鑑みれば、18 世紀は「ルソーの世紀」だったと言えるかもしれない。

ルソーは偏執的な被害妄想を患っていたことでも知られる。当時の文化や社会を嫌悪し、ヨーロッパ文明によって人間は「自然人」あるいは「高貴な野蛮人」としての美質を失ったと考えていた。支配と隷属が固定化し、分配は不平等になされ、人々は虚偽的な生活を送る。人間は本来は善良だったのに、堕落して邪悪になっている。小さな田園的共同体で想像力ゆたかな人間性を回復することで、人類の魂を更新するべきだ。それがルソーの基本的な考え方だった（中川 1983）。ヨーロッパで 18 世紀は「啓蒙の世紀」と呼ばれたが、ルソーは反啓蒙の極に位置する思想家であると同時に、ある意味では啓蒙の完成者だったと言えるかもしれない。実際のところ、彼の思想は 18 世紀後半にドイツ語圏のヨハン・ゴットフリート・ヘルダーやヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテを鼓舞して、「シュトゥルム・ウント・ドラング」という情熱および想像力を賞賛する文学運動を巻きおこし、それがドイツ・ロマン主義の成立を準備した。

カント自身にも決定的な「ルソー体験」があった。1764 年にカントが出版した『美と崇高との感情性に関する観察』の自家用本に、彼はつぎのように書きこんでいる。

> 私は根っからの研究者だ。知識を心底から渇望し、前進したいという思いでせわしなく、何かを得ては満足する。そのようにしさえすれば、人類に栄光を帰することができると考えていた時期があって、無知な烏合の衆を軽蔑していた。ルソーが私を正してくれた。利点と思いなして眼をくらませていたものは消えうせ、私は人間を尊敬することを学んだし、人類の権利を確立するために、研究がほかの人々みんなに価値あるものを与えることができると信じないようなら、私としてはじぶんが身分の低い労働者よりも役立たずだと感じるようになっただろう。（20: 44）

ルソーがカントを「正してくれ」て、カントは「人間を尊敬すること」を学んだと告白している。ルートヴィヒ・エルンスト・ボロウスキーのカント伝では、「『エミール』が初めて現れたとき、カントはそのために数日間、いつもの散歩をよしたほどである」（ボロウスキーほか 1967: 79）と報告されているから、カントのルソー体験とは「エミール体験」としての「人間再発見」だったと見て良いだろう。

それではカントは、どのような人間感を抱いていたのか、ということが本論文の関心の対象になる。1800 年に刊行された講義録『論理学』によると、彼は哲学の領野が 4 つに分かたれると考えていた。

（一）私は何を知ることができるか
（二）私を何をするべきか

（三）私は何を望んでも良いか

（四）人間とは何か

第一のものは形而上学に対応する。第二のものは道徳、第三のものは宗教、第四のものは人間学に対応する。しかし最初の三つは最後のものに関係づけられるため、原理的にこれらのすべては人間学ということになる。(9: 25)

カントは、哲学者としての営為をいわば「人間学者」の営為と考えていたことになる。ここで考えておきたいのは、カントの同時代にドイツ神秘主義的の命脈を引く敬虔主義と呼ばれるプロテスタンティズムがドイツ語圏を席巻していたことだ。敬虔主義は神秘的な感情に包まれつつ「新しい人間」を探究することを理想としていた。マンフレッド・キューンのカント伝は、カントが敬虔主義に距離を起きつつも、まさにその「新しい人間」という課題を新しい道徳性の提示が解決するものと考えていたことを指摘している（キューン 2017: 301–303）。

カントは「新しい人間」の思想家だった。だが、彼はそもそもじぶん自身という人間をどのように理解していたのだろうか。その点を確認していく必要がある。

2. カントの自閉度、あるいは自閉的傾向について

筆者の思い出話になるが、もう 20 年以上前にカントに関するいくつかの逸話を知ったときに、身近に感じることが多かった。実際にドイツ語の原文を読んでみて、その哲学の徹底性や文体の凝ったところに感銘を受け、筆者自身に哲学的な方向とは異なっていても、やはり徹底的な傾向があったために、また文体にも凝る傾向があったために、非常に親しみを覚えた。筆者が 40 歳で自閉スペクトラム症の診断を受けたあとは、カントにもきっと同じ特性があったのではないかと推測するようになった。自閉スペクトラム症の特性を有していると、研究職に適性があるとよく話題になるため、カントがそうだったとしてもけっして不思議ではない。

カントが生まれたのは 1724 年。統一ドイツが成立する 150 年ほど前にあたるが、その統一の原動力になったプロイセンにカントは生まれた。正確には飛び地だった東プロイセンの中心都市ケーニヒスベルクが生誕地だ。この街は現在ではロシア領に属していて、「カリーニングラード」と呼ばれている。

カントは生涯のほとんどをケーニヒスベルクで過ごし、居住経験のあるほかの土地と言えば、せいぜいケーニヒスベルクの郊外くらいだった。多くの知識人がヨーロッパのさまざまな国に旅行して知見を深める機会が多かった時代だから、カントの生活スタイルには「自閉的傾向」、正確に言えば自閉スペクトラム症に顕著な「こだわり」が感じとれると言って良い。とはいえ伝記作家のキューンは、このあたりの事情について、カントが地元の友人知人たちとの社交を大切にしていたこと、ケーニヒスベルクを理想的な都市と考えていたこと、またカントは虚弱な体質で

長旅は困難だったことを指摘している（キューン 2017: 426–430）。カントは私講師、家庭教師、図書館司書などとして糊口を凌ぐなか、エアランゲン大学やイェーナ大学から正教授として招聘されたものの、いずれも固辞して、1770 年に母校ケーニヒスベルク大学の正教授に就任した。

カントと言えば、時計の歩みにしたがって緻密な時間配分で生活し、その散歩する姿を見て住民が時計の針のズレを直した、という伝説がまことしやかに伝えられている。筆者はここにもカントの「自閉度」を感じてしまうのだが、その習慣はカントの最大の親友にあたるジョセフ・グリーンに感化されたものものだったらしい。グリーンは青年時代にイギリスからケーニヒスベルクに移住した商人で、きわめて厳格な行動方針にしたがった生活を送ったことで知られ、まるで学者のような印象を与えたという。同時代にケーニヒスベルクに住んでいた作家テオドール・ゴットリープ・フォン・ヒッペルの一幕劇『時計男――几帳面な人』（1765 年）の主人公はグリーンをモデルにしたものと噂されている。キューンはカントとグリーンの交友が始まった時期を、この一幕劇が発表されたのと同じ 1765 年と推測する（キューン 2017: 309–310）。そのカントとグリーンの交友の一端について、ラインホルト・ベルンハルト・ヤッハマンのカント伝は、つぎのように紹介している。

> カントはある晩グリーンに、翌朝八時に 遠乗りのお供をしようと約束しました。グリーンはそういう場合には、七時四十五分にはもう時計を手にして室内を歩き回り、五十分になると帽子をかぶり、五十五分にはステッキを持ち、八時を打つ最初の音とともに馬車の扉をあけるというふうでしたが、彼はさっそく出発しました。 途中で、約二分ほど遅れたカントが向こうから来るのに出会いましたが、馬車を止めませんでした。これは彼の申し合わせに反し、彼の規則に反したからというのです。／カントはこの才気に富み、高潔で、しかも風変わりな人物と交際して、自分の精神と心情とに多大の糧を見いだしたので、日ごとにこの人と会い、多年の間、一日の幾時間かは欠かさず、この人のもとで過ごすことにしていたほどです。カントはいつも午後に出かけていきましたが、グリーンが安楽椅子に眠っているのを見ると、自分も彼と並んですわり、考えにふけりながら同じように寝入ってしまうのです。それから、いつも銀行頭取のルフマンが来て同じように眠り込んでしまうと、最後に、マザービーが定まった時刻に部屋にはいってきて仲間を起こし、それからみんなで七時までとてもおもしろく話に興じたのです。この仲間はきちんと七時に別れたので、その通りに住んでいる人びとは、「まだ七時にはならないだろう、カント先生がまだお通りにならないから。」と言うのを私はたびたび聞いたものです。（ボロウスキーほか 1967: 181）

このグリーンとの交流から、カントも「時計男」へと変貌していった。晩年のある午餐の談話で、カントの朝が早いと話題になった際、カントは 30 年近く仕えてきた召使に向かって、じぶんが朝の起床に悩んだことがあったかと尋ね、まったくないという答えを引きだしたという逸話をボロウスキーが報告している（ボロウスキーほか 1967: 66）。

そもそもカントに精神疾患の傾向があったことは、以前から知られてきた。18 世紀のヨーロッパでは、心気症が知識人の間に蔓延しており、カントもこの精神疾患に悩んでいた。若い頃から生に対する倦怠を感じ、胸のうちに圧迫感があって、カント自身はその理由を心臓と肺が運動するスペースが小さいことに帰していた（キューン 2017: 303–305）。心気症について基本的なことを書けば、医学的な検査では身体的器質の疾患が発見できないのに、ささいな身体的不調を感じることによって、重篤な病気にかかっていると不安を抱くというもので、現代世界の精神疾患に関するもっとも有力な手引き書『精神疾患の診断・統計マニュアル』第五版追加修正版（DSM-5-TR）では「身体症状症」と呼ばれ、以下のように診断基準が設定されている。

【A】１つまたはそれ以上の、苦痛を伴う、または日常生活に意味のある混乱を引き起こす身体症状

【B】身体症状、またはそれに伴う健康への懸念に関連した過度な思考、感情、または行動で、以下のうち少なくとも１つによって顕在化する。

（１）自分の症状の深刻さについての不釣り合いかつ持続する思考

（２）健康または症状についての持続する強い不安

（３）これらの症状または健康への懸念に費やされる過度の時間と労力

【C】身体症状はどれひとつとして持続的に存在していないかもしれないが、症状のある状態は持続している（典型的には 6 カ月以上）。（APA: 341）

筆者はカントを悩ませたこの心気症ないし身体症状症が、実際には自閉スペクトラム症の「こだわり」に由来する強迫観念だったのではないかと推測している。というのも、ほかならぬ自閉スペクトラム症の筆者にも心気症の傾向があって、重篤な身体的不健康がないにも関わらず、いつもじぶんがもしかすると末期の癌患者ではないかという疑いに支配されているからだ。

カントは障害にわたって大きな病気と無縁で、当時としては非常に長命なことに 79 歳で死去することになったのだが、つねに健康に関する不安に悩んで生きていた。さらに言えば、彼のその不安は排泄の問題にも関係していたようだ。カントには慢性的な便秘があり、かなり場違いな場面でも腹具合をしきりに気にしていたという（キューン 464–465）。それもやはり自閉スペクトラム症の「こだわり」が関係している部分もあったのではないか。自閉スペクトラム症者は消化・排泄器官を含めて内臓感覚に弱い当事者が多く、排泄に関する悩みはけっして縁遠いとは言えない。

以上、カントの生活史に一定の展望を与えたが、カントにはそれなりの「自閉度」が推測される一方、それがどれほど決定的だったのかについては、まだ判断を保留するしかない。

3. 宇宙と霊界を思う人

1740 年、カントは 16 歳でケーニヒスベルク大学に入学した。1727 年に死去したイギリスの哲学者アイザック・ニュートンが自然哲学の分野に残した影響は甚大で、カントはその影響を受けて自然哲学者として出発した。カントは 1746 年に大学を去り、1749 年に卒業論文「活力測定考」を提出し、学位を得た。1755 年に『天界の一般自然史とその理論』を刊行し、これは前批判期の代表的著作のひとつと見なされている。カント研究では『純粋理性批判』初版（1781 年）以後の時期が「批判期」と呼ばれ、それより前の時期が「前批判期」と呼ばれる。『天界の一般自然史とその理論』は、印刷中に出版社が倒産するという不幸に見舞われ、小部数が流通しただけだった。

この著作でカントは、宇宙は神が配置した引力と斥力によって無限かつ永遠の創造過程を示すものだという考えを打ちだしている。1796 年になって、フランスの数学者ピエール＝シモン・ラプラスが、太陽系の形成過程についてカントとは独立に仮説を提出したが、カントが論じた内容と一致点が多かったために、彼らの学説はまとめて「カント・ラプラス星雲説」と呼ばれている。現在の惑星誕生に関する主流的な学説群も、ふたりの学説から発展したものが多いため、カントの名は天体物理学史上で燦然と輝いている。

ただし実際にこの書物を読んでみると、とりわけ最後の部分で私たちは奇想天外な印象を受けざるを得ない。そこにはいわゆる「存在の連鎖」の観念が登場している。「存在の連鎖」とは、新プラトン主義の影響下に成立した観念で、宇宙は無数の生命体によって満たされており、あらゆる生命体は鉱石、植物、動物、人間、天使、神へと至る階層構造を形成しているという観念だ。近代になってもヨーロッパ人にとって普遍的な観念で、19 世紀の宇宙論を読んでいても、私たちはしばしばこの観念に遭遇する（ラヴジョイ 1975）。

カントの時代には、とりわけフランスの思想家ベルナール・ル・ボヴィエ・ド・フォントネルが 1686 年に刊行したベストセラー科学啓蒙書『世界の複数性についての対話』の影響が広く残存していた。この著作で、著者のフォントネルは貴族の女性と天文学について語りあい、地球は生命体であふれているのだから、月も金星も同様でないと筋が通らないと主張する。地球にも生物の多様性があるように、太陽系のほかの惑星の住人にも異なる気質や習慣があるはずだというイメージが提出される（フォントネル 1992）。この考え方をカントはそのまま受けついだわけだが、カントの個性的な部分は、「存在の連鎖」の階層構造が、太陽とそれぞれの惑星との距離に反映されていると推測するところだ。カントの議論を聞いてみよう。

> さまざまな惑星の住人、それどころかそれらの惑星に住む動物や植物をも構成している物質は、一般に太陽から離れれば離れるほど、それだけ軽くて繊細な性質になり、それらの身体の利点ある素質も含めて組織繊維の可塑性もそれだけ完全になるはずだ。（1: 358）

つまり水星、金星、地球、火星、木星、土星と太陽から離れるにつれて、住人の身体組成はより完全になり、知的水準もあがっていくとカントは考えた。当時は古代から知られている土星までしか発見されておらず、天王星が発見されたのは『天界の一般自然史とその理論』より四半世紀ほどのちの 1781 年、海王星が発見されたのは 1846 年、いまでは「準惑星」と格下げされた冥王星が発見されたのは 1930 年のことだ。なかでもカントは、最大の惑星にあたる木星に関心を傾ける。カントは以下のように推論を重ねる。

> もしかすると、すべての天体が充分に形成されきっていないのだ。大きな天体がその物質の安定した状態に落ちつくには数百年か、ひょっとしたら数千年がかかる。木星はまだそうやってもがいているのだと思われる。（略）しかしながら、木星がいま住民を持たないとしても、形成期間が終わったのちに居住者が現れると推測することは楽しいものだ。（1: 352）

つまり太陽から遠い惑星は、地球より水準が高いだけに、まだ形成されきっていなくて、知的生命体が出現するのは将来のことかもしれないとカントは考える。惑星の形成が「数百年」や「数千年」と考えられている点は、現代人の感覚からすると奇妙に思われるが、カントの時代はまだ人類の歴史は最初の人間にあたるアダムとエヴァの時代から数えて 6000 年かそこらしかないと推測されていたから、その感覚での発想だとわかれば、不思議ではない。

さらにカントは、輪廻転生のアイデアを持ちだす。一般的に輪廻転生は東洋の宗教的観念と誤解されがちだが、実際には古代からヨーロッパにも存在した。近代になると、イタリアの哲学者で異端として処刑されたジョルダーノ・ブルーノが輪廻転生を信じるなど、一部の知識人のあいだで輪廻転生の思想が復活した。18 世紀末のドイツ語圏では、ゴットホルト・エフライム・レッシングが 1780 年に刊行した『人類の教育』がこの問題をテーマとして取りあげ、翌年にはヨハン・ゲオルク・シュロッサーが、輪廻転生を中心問題とした著作『魂の移住について』を刊行し、ヘルダーが 1784 年に刊行した『人類歴史哲学考』などがこの流れに乗った。カントの『天界の一般自然史とその理論』はこの動向に四半世紀ほど先行していた。さらにカントの議論を見てみよう。

> 不死の魂はまったくの無限性のうちに来世へと持続し、埋葬によって中断することはなく、たんに形が変化するだけなわけだが、はたして宇宙空間のこの一点に、つまり私たちの地球にずっと縛りつけられたままなのだろうか。創造の別様の奇跡ともっとまじかに関わることはないのだろうか。宇宙の離れた場所にあるあの球体を、遠くから見ても好奇心をそそられる準備状況のすばらしさを、いずれまのあたりに親しむことはないのだろうか。ひょっとすると、私たちがこの地球に滞在するように割りあてられた期間を満了したのち、ほかの天体が新しい居住地となるようにという準備のために、宇宙空間にはまだほかにいくつかの球体が形成中でいるのではないだろうか。木星を回るあの衛星は、いつの日にか私たちを照らし

てくれるために、運行しているのではないだろうか。(1: 387)

つまりカントは、木星に生命体が出現するのは将来のことだろうと推測しつつ、その生命体とは地球人が未来の世界に転生した姿だと想像をたくましくしたのだ。哲学史家の松山壽一は、『天界の普遍自然史とその理論』では、カントの思想の全体が「独断のまどろみ」に包まれていると指摘しているが（松山 2004、77 頁）、そのとおりと言うほかない。「独断のまどろみ」に関してはのちにも話題にするが、基本的なことだけ言えば、カントが前批判期のじぶんの哲学状況について述べた簡潔な要約だ。カントはこの著作で、「自然はカオスのなかにあってすら、規則的かつ秩序だって作動するほかないのだから、神は実在する」(1: 228) とまさに独断的な神の存在証明をおこなっているし、「われに物質を与えたまえ、われそれより一個の宇宙を構築してみせん。つまり私に物質を与えてくれ、ひとつの宇宙がどのように発生することになるかを示してみせようと言ったとしても、それはある意味では不遜とは言えないのだ」(1: 229–230) と、大見得を切っている。ここには「自閉」があるかもしれないが、その自閉は時代全体の性質だった可能性が高い。

しかしながらカントは、前批判期のうちにも徐々に議論の慎重さを高めていく。『天界の一般自然史とその理論』の 11 年後、1766 年に刊行された『形而上学の夢によって解明された視霊者の夢』を対比してみよう。この著作では、スウェーデンの神秘主義者エマヌエル・スヴェーデンボリの霊界体験が検討されている。スヴェーデンボリはもとは鉱山技師だったが、多様な分野で高い水準の研究をおこなうようになり、10 種類ほどの外国語も自由に操ったらしい。老年期に入ってからいわゆる神秘体験を得て、霊界探訪の記述を発表するようになった。カントは『形而上学の夢によって解明された視霊者の夢』で、まずは「私は霊体が実在するかどうか知らないし、それどころか霊という言葉が意味するのかもまったく知らない」(2: 320) と語るが、敬虔なキリスト教徒としてスヴェーデンボリが示した展望に共感を誘われる。なにより『天界の一般自然史とその理論』でカントはすでに輪廻転生を公然と支持していた。だからカントは「告白するが、私は、宇宙には非物質的な本性のものが実在すると主張し、私の魂そのものをそのような存在者に参入する、という立場に大いに傾いている」と語る (2: 327)。加えてカントは、「亡くなった人が現れたという初歩的な錯覚ですら、おそらく死んだあとでもなんらかの仕方で消えさっていないという心くすぐる願いから生まれたものだろう」と心霊現象にも寛大な姿勢を見せる (2: 350)。ここでカントが個性的なのは、人間を一種の二重体と見る視座を示す点だ。

人間の魂はこの現実上の人生でも、すでに同時にふたつの世界と結びついていると見なされなければならないだろう。魂は一個の身体と結びついて人格的統一体となっており、物質的世界だけをはっきりと感受する。しかし他方では霊界の構成員として、つねに霊的な本性のものたちと結びつきがあって、魂の意識には澄んだ直観が開示されているはずなのだ。
(2: 332)

一面では地球上の現実に生きながら、一面では同時に霊界に生きる二重体としての人類。このような展望を与えつつ、しかしカントは最終的にスヴェーデンボリの体験を真実と判定しないだけでなく虚偽とも判定しない道を選ぶ。カントは「私は、読者が視霊者たちを異世界のなかば住民に属する者とは見なさず、ずばりと言えば病院に入ったほうが良いものとして処理し、さらなる詮索に関わらない道を選んだとしても、なんら非難することはない」(2: 348) と請けあう。それでいて彼は真偽の判定をくだすこと自体を放棄する。

> 私はさまざまな霊体に関する物語に関していっさいの真理をあえて拒否することはしないし、ひとつひとつについて疑わしいとは考えるが、全体として見たときにはいくらかの信用を寄せるという、奇妙かもしれないかもしれないけれども、常識的な留保の姿勢を示したい。(2: 251)

『形而上学の夢によって解明された視霊者の夢』を高く評価したカント研究者の坂部恵は、カントが批判期に移行したことによって、この著作に見られた「思考の柔軟さと徹底性」が批判期の著作から多少「こぼれ落ちるという犠牲と不幸を強いられたのではないか」と問題提起している（坂部 1976: 131)。筆者は必ずしもそのようには考える者ではないが、少なくともカントのこの著作が『天界の一般自然史とその理論』の立場から離れて、批判哲学への助走に入っていることはまちがいあるまい。

上で見た判断の留保はネガティヴ・ケイパビリティと言いかえることもできる。この概念はイギリスの詩人ジョン・キーツが述べたもので、安易に答えを出さずに二項対立のなかで宙吊りにされるのに耐える能力を意味している（帚木 2017: 3)。「白黒思考」や「ゼロ百思考」が強いと語られる自閉スペクトラム症者たちは、カントの思想的発展から学べるものが多いと思われる。

4. 批判哲学と能力心理学の人

カントは哲学史上一般に、大陸合理論とイギリス経験論を総合した人物として説明される。大陸合理論とは、人間には生まれつきに理性が備わっており、それによって知識を獲得していく能力を持つと考える立場で、論証的知識を重視して、いわば理詰めで物事を把握する。フランスのルネ・デカルトを祖とし、オランダのバールーフ・デ・スピノザ、フランスのニコラ・ド・マルブランシュ、ドイツのゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツなどによって展開された。他方でイギリス経験論は、人間の心は本来は白紙のようなもので、経験を通じて知識を獲得し、理性を育むのだと考える立場で、経験的実証を重視して、現実主義的に物事を把握する。イングランドのフランシス・ベーコンを淵源とし、イングランドのジョン・ロック、アイルランドのジョージ・バークリー、スコットランドのデイヴィッド・ヒュームらによって展開された。

カントは、ライプニッツの哲学を継承したクリスティアン・ヴォルフの濃厚な影響下に哲学的営為を出発させたが、すでに述べたように当初からイギリスからはニュートンによる自然哲学の影響を大きく受けていた。そこに、決定的な影響としてヒューム哲学の流れが加わる。カントがじぶんのルーツはスコットランドにあると誤認していたこと、ヒュームがカントと同じく生涯独身で子どもをもうけなかったことなど、カントはヒュームに対して独特の思い入れを持っていたのかもしれないが、いずれにせよ 1755 年にヒュームの『人間知性の研究』のドイツ語訳が刊行され、カントはそれを読むことができた。1762 年にヘルダーがカントから受けた講義でもすでにヒュームが話題になっていたようだが、ヒュームの哲学がカントの主要な問題意識にのぼったのは 1771 年前後らしい（キューン 2017: 262–265, 453）。カントは 1770 年に刊行した『可感界と可想界の形式と原理』を最後として長い沈黙の時期に入り、10 年後に『純粋理性批判』が刊行されて、批判期が幕を開ける。

ヒュームは人間の知覚を印象が観念を生みだす作用と考え、その知覚が人間に繰りかえしもたらされることによって、あることと別のことが本来は別々に起こり、あることが別のことに帰結しているわけではないのに、人間はそれを必然的な因果関係として錯覚していると主張した。ヒュームの考えでは、因果関係は習慣の結果として私たちの心のうちに成立しているだけで、過去の出来事と現在の出来事と未来の出来事がつながっているように感じられるのは、人間が作りだした虚妄にすぎないのだった（ヒューム 2019）。

カントは 1783 年に刊行した『学問として登場しうる将来の形而上学のための序説』（通称『プロレゴーメナ』）で、「ヒューム体験」による「独断のまどろみ」の解体について語っている。

> 私が率直に認めたいのは、デイヴィッド・ヒュームを思いだすことで、何年も前に私の独断論のまどろみを初めて中断し、思弁哲学の分野における私の研究にまったく異なる方向を与えたということです。私はヒュームが出した結論についてはまったく聞けないままでした。それは単純に、ヒュームがじぶん自身の課題の全体像を想定しておらず、一部のみに注目していたからで、しかし全体を考慮に入れないとなんの情報も得られはしないのです。
> (4: 260)

カントはヒュームの論理を人間の理性には上限があり、知りえないことがあるという啓示のようなものとして受けとった。批判期が決定的に重視されがちなカント研究ではふつう指摘されないが、ここにはかつて『天界の一般自然史とその理論』や『形而上学の夢によって解明された視霊者の夢』で示された人間感が下敷きになっていることは強調しておきたい。前者では、地球人は水星人や金星人より上位の存在とされ、火星人、木星人、土星人より下位の存在という位置づけにあった。後者では人間は現実世界と霊界と同時に結ばれながら、私たちは現実のみを把握できると考えられていた。したがって、ふたつの著作はともに人間の、あるいは地球人の理性の限界を問題にした著作でもあったのだ。

カントは1781年に『純粋理性批判』の初版（通称「A版」）を刊行したものの、同書はヒュームによる懐疑論の焼きなおしだという批判にさらされた。誤解を正すために、カントは大幅に記述を変えた第二版（通称「B版」）を準備し、1787年に刊行した。大規模な改定にも関わらず、多くのカント研究は両方の本に本質的な変更がないと考えているし、筆者もそのように考える。

カントは同書でまず「純粋認識と経験認識の区別」が必要だと主張する（B1）。カントが言う「純粋」とは「経験によらない」ことを意味しており、前者の性質はアプリオリ（先験的）、後者の性質はアポステリオリ（後験的）とも呼ばれる。カントはじぶんの立場を「超越論哲学」と称したが、この「超越論」もアプリオリな認識に関わることを意味している。原語はTranszendentalphilosophieだが、以上の事情を踏まえて先験哲学と訳されることもある。

カントは経験を排除した純粋認識、そしてアプリオリな判断を考察することで、人間の理性の限界を見極めることができると考えた。そもそも『純粋理性批判』、批判期、批判哲学などの「批判」とは非難や悪口のことではなく、ドイツ語Kritikや英語criticの語源になったギリシア語 $\kappa\rho\iota\nu\omega$（クリノー）の語義「判別する」のことだ。つまり人間の理性が適用可能な範囲と不可能な範囲の判別こそがカントの課題なのだ。

カントはアプリオリな判断には、アプリオリな分析判断とアプリオリな総合判断の二種類があると考える。前者は「物体には延長がある」（B11–12）のように主語がすでに述語を含まれている。「延長」とは、つまるところ縦・横・高さのことだが、物体という語義には、そもそも縦・横・高さを持つものという含意が内在している。その意味でアプリオリな分析判断は認識拡張的ではない。それに対して後者は「7は5を足すと12になる」（B15）のように、主語が述語を含んでいない。7という数は5という数とも12という数とも異質だ。そのためにカントは数学は総じてアプリオリな総合判断で、認識拡張的だと論じる。

さらにカントは人間理性の限界を見極めるために、人間の認識能力の構造を考察する。カントは私たちには受動的な能力としての「感性」と、これと協働する能動的な能力としての「悟性」があると論じる（A51/B75）。感性はアプリオリな形式的制約と位置づけられ、外的形式としての空間的直観と内的形式としての時間的直観から構成されている。「物自体」はこのふたつの「純粋直観」をつうじて、人間に「現象」を与える（A19–22/B34–36）。「物自体」が人間の心を触発して「現象」を与えるというモデルは、イギリスの哲学者ジョン・ロックをモデルにしていると考えられるが（冨田 2017: 9–14）、いずれにせよカントが言いたいのは、私たち有限な理性を持つ人間にとって物自体は認識できず、物が私たちに現象してくるさまだけを認識しているということだ。つまり私たちは、この世界の基盤そのものに到達できない。

日本のカント研究で「悟性」と呼ばれる能力の原語はVerstandで、カント哲学でなければ「知性」や「理解力」と訳されるものだが、カントはこれを「理性」（Vernunft）とは別物と考え、また理性のほうを上位の能力と考える。Verstandは「知性」と訳されることによって、人間の思考力一般を意味する能力と誤解される恐れがあるために、結果として「悟性」というふだん日本人が使わない言葉に訳される習慣が定着した。その悟性をカントは概念の判断機能と位置づけ、悟

性の機能の形式は 3 種類ずつの量・質・関係・様相に由来する 12 の範疇（カテゴリー、別名「純粋悟性概念」）の表で網羅されると主張する（A70/B95）。その 12 区分のもとに人間は自らの経験の対象として物を与えるとカントは論じ、「内容を欠いた思考は空虚であるし、概念を欠いた直観は盲目である」と述べる（A51/B75）。

さらにカントは感性と悟性のあいだを媒介するものが「構想力」の「図式」だという見解を示す（A137–147/B176–187）。感性、悟性、構想力は「私は考える」という「統覚」の各機能として作動する（B131–139）。統覚とは「じぶん自身の同一性の根源的かつ必然的な意識」（A108）、また「同一的自己」（B135）にほかならない。この統覚が理性も駆動するが、カントのいう理性とはかんたんに言えば推理能力のことだ。『純粋理性批判』の「純粋理性」とは、感覚や経験に由来する要素なくして自立的に推理を進める思考力を意味している。

以上のように、カントは人間の感受性や思考力をいくつかの能力に分解しながら議論を進める。20 世紀のフランスの哲学者ジル・ドゥルーズは、「カント哲学の最も独創的な点の一つは、われわれの持つ諸能力の間の本性上の差異という考えである」（ドゥルーズ 2008: 50）と述べたが、実際にはそのような能力観は「能力心理学」として近代以前の心理学には珍しいものではなかった。 カントはこの点でヴォルフの見解を換骨奪胎したと考えて良い。それはどういうことか。

ヴォルフは著作『経験心理学』（1732 年）で、人間の心には認識能力と欲求能力があると論じ、認識能力は下級と上級に分かれると指摘した。下級認識能力には「感覚」（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の五感）、「想像」、「記憶」があり、上級認識能力には「注意」、「反省」、「知性」がある。「注意」とは、複合的な知覚の明晰性を高める能力、「反省」とは私たちが認識するものごとの諸側面に注意を向けて、それらを比較する能力、「知性」とはほかと区別しながら表出する能力で、単純な概念による把握、判断、論理形成の三種が稼働する（Rumore 2018: 184–190）。カントがヴォルフのいう認識能力を再編成しながら批判哲学を形成したことは、疑えない。

カント哲学は、前近代的な能力心理学の影響を受けていたことによって、「自閉的」に見えやすいと言えそうだ。しかし世界の根底を理解できないとする批判哲学の根本的見解、時間と空間の位置づけを制限した感性論、12 個のカテゴリーで人間のあらゆる判断を整理できると見なす悟性論、なにより理性の限界を見極めたいと考えるという全体の構想は、やはり筆者には「自閉度」の高いものと思われてならない。

5. 自律的自由、大学の自治と学問の自由の人

カントは『純粋理性批判』で、「形而上学が探究すべき本来の目的とは、三つの理念だけである。すなわち神、自由、不死性だ」と述べ、それぞれを「神への認識」「世界論」「魂論」が扱うと論じる（A338/B396）。難解なのは、この「理念」の扱いは「統制的」にのみ可能で、「構成的」には不可能だと指摘されることだ。このふたつの語が意味するものについて、カントの解説は明示

的ではなく、研究者からはさまざまな解釈が出されているが、ここでは科学哲学を研究した寺中平治が『カント事典』に寄せた説明を聞いてみよう。

> 理性は、純粋理性概念、つまり理念（イデー）によって、多様な悟性認識に体系的統一（理性統一）を与えるもの、悟性の規則を原理のもとに統一する能力である。カントによれば、この理性概念は統制的原理（あるいは主観的原則という意味での格率）で、統制的使用に限られるとされる。理念としては、魂（心理学的理念）、世界（宇宙論的理念）、神（神学的理念）の三つが挙げられるが、たとえば理念として、超経験的なものである最高叡知者（神）を想定し、あたかも世界のすべての秩序がこの最高叡知者の意図から生じたかのようにみなすことによって、目的論からする最高の体系的統一が、悟性認識の目標として与えられることになる。しかしこの理念を構成的に用いて、直接対象として与えられるとすることは、経験（可能的経験）を超えることになるから、理性概念の誤用となり、超越論的仮象（錯覚）に導くことになる。（寺中 2014: 168）

「格率」はのちにも述べるが「基本方針」を意味する。つまり、カントは魂ないし不死性、世界ないし自由、そして神の問題は理性として把握することが不可能なのだが、行動方針の対象として、つまり指針としての理想として設定することができると主張するわけだ。カントは、人間理性によってそれらは把握できないという彼の主張を正当化するために、不死性、自由、神に関する対立的な命題（テーゼとアンチテーゼ）がいずれも正しい、またはいずれも誤っているかたちで成立するという議論を遂行していく。その二律背反（アンチノミー）は 4 種が示されるが、なかでも重要度が高いのは「第三アンチノミー」と呼ばれるものだ。そのテーゼは「自然法則にしたがう原因性は、宇宙の現象がことごとく導出されうるような唯一の原因性ではない。宇宙の現象を説明するには、自由という原因性を想定することが必要である」（A444/B472）、アンチテーゼは「自由は存在せず、宇宙におけるあらゆるものは、ただただ自然法則に従って発生する」（A445/473）となる。カントはこの両方の命題がともに真実だと主張する。なぜならカントは因果性と必然性は悟性の 12 のカテゴリーに属する悟性概念で、それを理念（理性概念）に属する自由に適用することによって論述が破綻していると思考するからだ。

なぜこの「第三アンチノミー」が重要かと言えば、『純粋理性批判』ののちに書かれたカントの実践哲学の課題に直結していくからだ。一般的にカントの最重要著作は『純粋理性批判』だと考えられがちだが、カント自身は同書で紡がれた思弁哲学よりも実践哲学をじぶんの本領と考えていた。思弁哲学は実践哲学の補助線にほかならない。『純粋理性批判』の 4 年後、1785 年に刊行された『道徳形而上学の基礎づけ』の以下の文章を見ると、カントの思想が『形而上学の夢によって解明された視霊者の夢』から『純粋理性批判』を通過して『道徳形而上学の基礎づけ』に連絡しているのはあきらかだ。

ふたつの立場から、理性的存在者はじぶんを観察し、じぶんの力の使用に関する法則を認識できるのであって、そのふたつが理性的存在者のすべての行動の法則なのだ。つまり、理性的存在者は第一には感性界に属し、自然法則のもとにある（他律）が、第二には英知界に属するものとして、自然から独立した、経験的ではない、まったく理性だけに基礎を持つ法則のもとにある。(4: 452)

人類は、一面では自然の因果性が支配する感性界に属する他律的な存在だが、別の一面では自由が可能な英知界に属する二重体ということになる。『形而上学の夢によって解明された視霊者の夢』では、現実世界と霊界の二重体と見なされた人間（地球人）が、『純粋理性批判』の「理性」の見極めをめぐる議論に立脚して、『道徳形而上学の基礎づけ』で自然法則の支配する感性界と自由の躍動する知性界にともに属する二重体へと刷新された。したがってカントは『道徳形而上学の基礎づけ』で、「自然のすべての物は法則にしたがって働く。ただ理性的存在者のみが、法則の表象にしたがって行為する能力、すなわち原理にしたがって行為する能力を持つ。つまり理性的存在者のみが意志を持っている」と語る (4: 412)。「人間」という語を使わず、「理性的存在者」という語を使っているのは、地球人以外の太陽系の別の惑星の住人たちのことが、なおも念頭に置かれているからだろう。

カントは『道徳形而上学の基礎づけ』で「この宇宙のどこであろうとも、それどころかこの宇宙の外でさえも、無制限に善と見なされるものがあるとするならば、それは善意志だけである」と主張する（4: 393)。しかも「道徳法則はその原理ともども、すべての実践的認識のうちで、それ以外のすべての経験的なものを含む実践的認識から区別され、それどころかすべての道徳哲学は、まったくもって実践的認識の純粋な部分に依拠している」(4: 389）と主張され、アプリオリな道徳法則の探究が宣言される。このアプリオリな道徳法則の中核に属するものが一般に「格率」と訳されることが多い「基本方針」(Maxim）だ。それは個人ごとの「言動に関する一般的規則」と言っても良い。カントの定義を聞いてみよう。

基本方針とは、行為するための主観的原理であり、客観的な原理から、つまり実践的法則から区別されなければならない。基本方針は、理性が主観の諸条件にしたがって（しばしば主観の無知にも傾向性にもしたがって）規定する実践的規則を含み、そのために主観がそれにしたがって行為するための原則なのである。(4: 420–421)

この「基本方針」から個々の人間のもろもろの言動が生まれてくるというのがカントの人間観だ。さらにカントは「それぞれの理性的存在者の意志とは、普遍的に法則を立法する意志だという理念」を掲げる（4: 431)。人間という生命体は普遍的な立法をめざすことができるという見解が示されている。その上で、「定言命法」と呼ばれるカント哲学の究極の道徳思想が示される。

じぶんの意志の基本方針が、つねに同時に普遍的立法の原理として通用することができるように行動せよ。(4: 421)

じぶんが言論を述べ、行動する上での方針が、じぶんの構想する普遍的立法と一致するようにしなければいけない、ということだ。さらにカントは大胆にも「自由な意志と道徳法則のものにある意志は同一である」(4: 447) と主張する。なぜ定言命法の義務が自由と同じなのか、すぐには理解できない人が多いだろう。むしろ多くの人が、じぶんのやりたいようにやるのが自由だと考えているはずだ。しかしカントは、人間が肉体的な欲求に支配された状態とは、結局のところ感性界すなわち自然法則の世界に支配された他律的で不自由な状態だと考える。人間はじぶんで設定した普遍的な道徳法則を志向し、自然的な欲求の支配を抜けだすことによって、英知界すなわち自由の世界へと参入することができるというのがカントの論理だ。

『道徳形而上学の基礎づけ』の 3 年後、1788 年に刊行された『実践理性批判』では、「きみの意志の基本方針が、つねに同時に普遍的立法の原理として通用することができるように行動しなさい」というあの義務かつ自由の命題が「純粋実践理性の根本法則」(5: 30) と呼ばれる。同書でカントは「ふたつのことについて何度も長いあいだ考えてきたし、そのたびに新たにふくらむ驚異と畏敬があって、心を満たしてきた。私の頭上の星のきらめく天空と、私の心のうち道徳法則である」(5: 161) とじぶんの哲学の達成に満足感を見せる。この文言はきわめて有名なものだが、その 33 年前に刊行された『天界の一般自然史とその理論』で語られたつぎの文言と本質的に一致することは見過ごせない――「実際、このような考察、つまり以上の考察によって心が満たされるならば、晴れた夜に星のきらめく天空を眺めるとき、高貴な魂だけが感じるある種の満足を覚えるものだ。自然のあまねく静寂が広がり、感覚は安らぎながら、不死なる精神の隠された認識能力が、筆舌に尽くしがたい言葉を話し、解きえぬ概念を与えてくれる (1: 367)。地球の外に広がる広大な理性ある生命体の世界を思いながら、そうした「理性的存在者」の一員としての人間に、具体的にはじぶん自身の思想に思いを凝らす。感慨としては同じだが、カントの思想は前批判期から批判期に移行することで、完全に革新された。

カントの実践哲学にとって、もうひとつ重要な点を指摘しておかなければならない。それは他者の尊重、すなわちルソーから学んだ「人間を尊敬すること」の徹底だ。『道徳形而上学の基礎づけ』で、カントは「人間は事物ではないのだから、手段としてのみ使用されることはできず、すべての行為にあたってつねに人間自体が目的であると見なされなければならない」(4: 429) と指摘する。何か行動するにあたって、対象となる何かが「目的」でなければ、論理的に言って、それは目的に先立つ「手段」ということになる。場合によっては、人間が手段となることはあるにせよ、その場合にもその人が目的としての役割を持つようにしなければならないとカントは考える。かんたんに言えば、誰であろうとも、たんなる手段として使われて良い人間はいない、という倫理だ。その倫理は他者のみならず、じぶん自身にも適用される。つまり自分を何かの目的のためのたんなる手段として売りわたしてはならない。だからカントは「じぶんの人格のうちにも、また

あらゆる他者の人格のうちにもある人間性を、じぶんがいつも同時に目的として必要とし、けっしてたんに手段としてのみ必要としないように行動せよ」（4: 429）と述べる。そのように人間を目的として尊重する人々の集まりをカントは「目的の国」と表現する。カントによれば、「それぞれの理性的存在者は、じぶんの行動方針をつうじて、いつでも普遍的な目的の国の立法的構成員であるかのように行動しなければならない」（4: 438）。その場所に人間にとっての真の自由が開示される。

このようなカントの「自由」を尊重する哲学は空理空論ではなく、現実の問題に無縁だったわけでもない。カントはケーニヒスベルクの哲学部――ドイツ語圏の哲学部は日本で言えば文学部に相当する――で学部長を歴任した経験もあるが、それにかかわるさまざまな経験に立って『諸学部の争い』を 1798 年に刊行した。自由の哲学者だったカントらしく、カントはこの著作で「学者を学者として判定できるのは学者だけだ」と指摘し、大学は「自治権」を持って「一種の学問的公共体を形成する」ことを弁護する（7: 17）。つまり大学の政治府からの自律、あるいは自由を強調したのだった。大学という研究教育機関を生みだしたヨーロッパでは、伝統的に「政府が教説を裁可する」神学部、法学部、医学部が「上級学部」とされてきたが、カントはそれに対する「下級学部」の哲学部を「学問の関心にだけ配慮すれば良い学部」として、つまりいわゆる「学問の自由」を謳歌する学部として、その意義を顕彰する（7: 18–19）。「真理を公に開示することをめざす」哲学部は、実用本位の「上級学部」と闘争関係にあり、「つねに武装していなければならない」と主張され、哲学部を中心に大学が統一されることが夢見られる（7: 33）。

このカントの思想が後世のドイツ語圏でどのように継承されたかについて、教育学者の藤井基貴が説明している。

> 大学史において「学問の自由」の確保は、その後ベルリン大学で一定の実現をみることとなる。 哲学部自体はドイツ型近代大学の基盤として 19 世紀を通じて大学組織で飛躍的な地位の上昇を遂げながらも、その過程において理性の光のもとであらゆる学問を扱うという機能は見失われ、カントが主張した大学を統一する学部としての機能をもつことはできなかった。（藤井 2003: 21）

カントの大学のあり方に関する理想はなかば成就し、なかば失敗に終わったと言える。

「自閉的傾向」ということに関して言えば、カントが個人が「基本方針」によって動くという人間観を抱いていたい点は、いかにもそれらしいと言えそうだ。実際問題として、自閉スペクトラム症者は、発達障害のない「定型発達者」と異なって、厳格な「マイルール」を設定しながら生きていることが非常に多い。カントが最大の義務を自由の発現と位置づけた点に関しては、それが「自閉度」の現れだとしても、卓抜な思想的達成と評価して良いだろう。大学の自治や学問の自由の主張に関しては、大学や哲学部の孤立を志向する点で「自閉的傾向」と言うことができても、自閉スペクトラム症の特性が最良のかたちで表現されたものと見なされるべきだ。

6. 社交、食事、嗜好品、自然美を愛する人

キューンは学生時代のカントについて、18 世紀の学生のあいだで一般的だった酒や喧嘩や女性の品定めに溺れなかったものの、ビリヤードやトランプをほどほどに楽しんだと説明している（キューン 2017: 143–145）。批判哲学のしかつめらしさから、カントは社交などが苦手だったのではないかと想像する人も多いはずだが、それは間違っている。それどころか、カントにとって社交は実践哲学の考え方から肯定されるべきものだった。1798 年に刊行された講義録『実用的見地における人間学』で、カントは「交際において歓楽と徳とを結合させている心持ちが人間性である」（7: 277）、「真正な人間性ともっとも合致するように思われる歓楽は善良な（できればそのつど異なる顔ぶれの）社交仲間との食事である」と述べている。ヤッハマンのカント伝を見てみよう。

> 注意すべきことですが、社交の席におけるカントは、ただその談話の技術によってばかりでなく、洗練された挙動によっても特に目立っていました。彼のふるまいには気高い自由な端正さと、趣味の豊かな軽快さとがありました。彼はどんな社交の集まりに出ても狼狽したことがなく、彼の態度を見れば、彼が集まりの中で、また集まりのために修養してきた人であることが知られました。言葉や身ぶりにも礼法に対する繊細な感情がうかがわれました。彼は社交的な柔軟さを充分にそなえ、どのような特別の席に出てもうまく調子を合わせることができました。婦人たちに対しては愛想のよい礼儀を示し、しかもその際少しも気取った無理なところがありませんでした。彼は好んで教養ある婦人たちと語り合い、またきわめて上品な好ましい態度で話すことができました。これを要するに、カントは社交の席では洗練された交際家であり、その高い内面的品位は、洗練された外面的教養によって、いっそう高められていたのです。（ボロウスキーほか 1967: 209）

批判哲学に移行したカントが物言いをきわめて慎重に洗練させていった事実はすでに確認したとおりだが、他方で社交の場での彼は本心を明け透けに開示することもまれではなかった。批判哲学での論調から無神論者や唯物論者と誤解されることが多かったカントだが、ヤッハマンはそのように誤解する人々は、カントとの社交の輪に入っていなかった人だと指摘する。

> カントが宇宙の構造について友人たちと語るときには、神の知恵、慈愛および力について全く夢中になって意見を述べるのがどんなにしばしばだったでしょう。またより良き生活の祝福について感動して語ったのも、どんなにたびたびであったでしょう。そしてこういうときには、この哲人の、この人の心は、内奥の真情と、率直な確信とを表明する争いがたい証人となったのです。天文学に関する話はカントを常に崇高な感激に浸らせたものでした。そういう話をただ一つ聞いただけでも、誰しもカントが神と神の摂理とを信じていたと納得せざ

るを得なかったのみでなく、それを聞けば無神論者をすら敬虔な人に改心させたにちがいないと思います。（ボロウスキーほか 1967: 200）

カントは大学で授業を終えたのちに、街に繰りだして嗜好品や娯楽に酩酊する習性を持っていたとボロウスキーが報告している。

以前には講義の終わった後で、午餐の席からコーヒー店へ行き、そこでお茶を一杯飲んで、その日の出来事について話したり、玉突きも一ゲームやったりした。またそのころ彼は夕餐の集まりにも、カード遊びは精神を活発にすると考えたので、よくこの遊びをした。カントはこの遊びがたいへん上手であったそうである。（ボロウスキーほか 1967: 67）

このようなカントの姿は、当時の知識人として奇異だったわけではない。バロック時代から啓蒙時代にかけて、ドイツ語圏では社交も社交論も花盛りだった。クリスティアン・トマジウス、クリスティアン・ヴォルフ、アレクサンダー・ゴットリープ・バウムガルテン、クリスティアン・アウグスト・クルージウス、クリスティアン・ガルヴェ、フリードリヒ・シュライアマハーたちが続々と社交論を展開し、その社交論自体が社交を促進する役割を果たした（高木 2023: 205–214）。

カントは『実用的見地における人間学』で、「ひとりで食事すること（それは食生活上の独我論だ）は、哲学を営む学者にとって不健康だ」、「というのも哲学的営為に従事する者は、じぶんの思惟を継続的に頭のなかに持ちあるいて、さまざまな試行錯誤をつうじて、どのような原理で体系的に結びつけるべきか見つけなければならないからであり、また理念とは直観ではないため、その人の前で空中にぷかぷか浮いているものなのだ」（7: 280）と哲学生活にとっての社交の有用性を強調している。哲学的な思念をこねあげるためにも、社交はカントにとって日常の欠かせない一部だった。

ボロウスキーによると、カントは「食事を共にする人びとが少しも巧みのない普通の会話の調子で話すことを望み、そして自分でも普通の方言混じりの言いまわしをわざと避けようとはしなかった」（ボロウスキーほか 1967: 66）。つまり率直で気さくな態度を積極的に示していた。社交の場で女王のように君臨する料理の問題についても、カントは熱心な探究者だった。

自分で献立を考え、そうして彼の出したすべてのもの、とりわけ彼の好物の料理が、他の人にもほんとうに気に入って食べられるのを見ると、とても喜んで、食卓の楽しみを午後の一時から四、五時ごろまでも延ばした。そのあと、食卓で用いた銀の食器を、さきにはそれを自分で下男に手渡したが、再び自分で戸棚にしまい込んだ。食後には、コーヒーや茶は飲まないで散歩した。それからその日の残った仕事を片付けたあと、晩年には決して夜食をとらず、十時にはかっきりと床についた。（ボロウスキーほか 1967: 67）

> 料理がおいしいと、それが男ばかりの座でも、料理の仕方を聞くのが好きであった。その話のあとで彼は、他の人びともその調理法になるほど必要だと認めるような、あれこれの点について非常に鋭く批判した。ヒッペルはたびたび彼に、「貴方はそのうちにきっと料理法批判をお書きになるでしょう。」と冗談を言ったものである。（ボロウスキーほか 1967: 67）

批判哲学をもじった『料理法批判』の可能性が話題になるほどに打ちとけ、ユーモアとエスプリが許される社交の場。それはある意味では、カントが実践哲学で語っていた人と人とが最大限に尊重しあう「目的の国」の成就だったのではないか。ヤッハマンによると、カントは非常にチーズを好み、とくにイギリス製のものを愛好したという。ほかには鱈料理を愛好し、朝の楽しみとして薄い紅茶とタバコをこよなく愛した（ボロウスキーほか 1967: 66, 221）。

飲酒に関してもカントは独自の見識を持ちあわせていた。彼は『実用的見地における人間学』で「飲酒は人を多弁にする。しかし飲酒は心を開かせもするし、ある道徳的特性、つまり開けっぴろげさの物質的運搬手段なのだ。じぶんの思想を奥まったままにすることは、純粋な心にとっては息苦しい」（7: 171）と、酒の社交にとっての有用さを指摘している。カントはワインとビールを対比することを好み、同書では穏やかな仕方でワインに軍配をあげている。いわく、「ワインとビールに関しては、前者はまったく滋味豊かな一方、後者はより栄養があって、食事と同じく腹を満たしてくれる。両方とも社交のための酩酊に役立つ。ただし違いもあって、ビールを使った宴会はより夢見心地なため人々は無口になって、しばしば粗暴でもあるのだが、ワインを使った宴会は陽気で賑やかで、ウィットに飛んだ会話がなされる」（7: 170）。だがアンドレアス・クリストフ・ヴァジヤンスキーのカント伝によると、カントが実際の社交で見せたワイン贔屓とビールへの嫌悪感はもっとはっきりしたものだったらしい。

> ことに彼はビールを飲まなかったのである。彼はこの飲物には最も反対した。もし誰かが最も働き盛りの年輩で死んだとすれば、カントは「彼はきっとビールを飲んだにちがいない。」と言った。またある人の身体がすぐれないことが話に上った時には、「その人は夜ビールを飲むかね。」と問わないことは少なかった。そうしてこの問いに対する答えから、カントは患者の占いを立てたものである。彼はビールを「徐々に人を殺す毒物」だと説明した。 昔、ある若い医者が、ヴォルテールがコーヒーを飲んでいるところを見つけて、その飲物をそう言ったものだが、この医者がヴォルテールから得た答えはこうだった。「たしかにこの毒は、徐々に人を殺すにちがいない。 わたしはそれをもう七十年飲んでいますからな。」（ボロウスキーほか 1967: 311–312）

カントが講義や午餐のための外出のほかに、そのように来客たちとの社交に多くの時間を割いていても、なぜ晩年にいたるまで多くの著作を刊行できたのか、という問題に関しては、ボロウ

スキーが回答している。講義が著作の母体になっていたこと、朝が早かったということ、人々はカントの仕事を妨げないように気を遣ったということ、午前の来客への対応は短時間ですませたということ、書物の厄介な校正は弟子たちが協力したということ（ボロウスキーほか 1967: 96）。

カントの社交に関する見解は、実践哲学だけでなく、のちにみる歴史哲学にも関係してくる。1784 年に発表された「世界市民的見地における普遍史の理念で、カントは「非社交的社交性」という想念を披露している。やや長大だが、カントの社交論にとっても歴史論にとっても核心的な意義を有するため、ぜひとも引用しておきたい。

> 自然のあらゆる素養を発展させるために自然が用いる方法は、社会における自然の素養の対立関係であり、この敵対関係が最後にはひとつの社会の合法則的秩序の原因になる。敵対関係ということで私が理解しているものとは、人間の非社交的社交性のことだ。つまり人間は社会のうちに入っていく性癖にあるが、それには例外なく抵抗が起こって、それがこの社会を絶えず分裂しかねないということがある。人間というものの自然的性質には明らかにそんな素養がある。人間にはみずから社会化する傾向性があるが、それというのも人間は社会化すると、じぶんがよりいっそう人間としてあることを、つまりじぶんの自然な素養が発展していると感じられるからだ。しかし他方で、じぶんはひとりだけでいたい（孤立したい）という性癖もある。なぜなら人間はじぶんのうちで非社交的特性と出くわすからで、あらゆるものをまったくじぶんの思いどおりにしたいと願っていて、いたるところでの抵抗を予期するからであるし、他人に対して抵抗したい性癖をじぶんの内部に見ているからだ。だがこの抵抗は、人間のあらゆる力を眠ざめさせ、怠惰になろうとする性癖を乗りこえさせて、功名心、権勢欲、所有欲によって駆動されながら、一緒にいるのが苦痛ではなく、放っておかれもしない仲間たちのもとで、じぶんの地位を獲得させるものなのだ。このとき、粗野な状態から人間の社会的価値を本来の内容とする文化へと向かう最初の歩みが発生する。あらゆる才能がだんだんと発展し、趣味が形成されて、たえざる啓発もあって思考様式の確立が始まる。（8: 20–21）

人間には社交をしたいという気持ちと、ひとりでいたい、いわば「自閉」していたいという気持ちがあって、その葛藤が社会を形成し、文化を生みだすという仕方で自然は存在している。そのようにカントは論理を紡いでいる。したがってこれはカントの一種の自閉スペクトラム症論と見ることも不可能ではない。

カントが社交好きだったという事実は、カントに「自閉的傾向」を見る筆者の観点を破綻させない。自閉スペクトラム症者でも、特性の濃度はマーブル状だから、つまりある面にこだわりがあって、自閉スペクトラム症の特性をよく発揮していても、社交に関しては受け流し方の技術を磨くことで、それほど苦労を感じなくなったという当事者も珍しくないからだ。なにより自閉スペクトラム症者は定型発達者との社交に苦労することが多くても、自閉スペクトラム症者同士だ

と――お互いに似ているわけだから――社交上のストレスは少ない。学者の世界には自閉スペクトラム症の特性が強い人は非常に多いわけだから、カントが社交家だった事実は、カントの「自閉的傾向」を否定しないのだ。

その上で、「非社交的社交」に関する議論を読むと、カントはやはりじぶんの「自閉的傾向」に気づいていて、このような想念を提出していたのではないかと思えてくる。他方、自閉スペクトラム症者でなくても、誰にでも疲れたときやストレスを感じているときには「自閉的傾向」めいたものを見せることはあるから、「非社交的社交」だけに注目してカントの「自閉度」を明示的なものと見なすのは性急だろう。カントの言動や思想的営為の全体から、カントの「自閉性」を考察することは必要なままだ。

ところで、カントは残念ながら料理や嗜好品に対する趣味判断に関しては、哲学的議論の俎上に乗せなかった。カントが論じた趣味は美と崇高に関している。彼は前批判期の 1764 年に刊行した『美と崇高との感情に関する観察』で、この美と崇高というふたつの「感情」を以下のように比較している。

> 両者の感情とも心地よいものだが、そのあり方はとても異なっている。積雪した山頂が雲を突きぬけている眺めは崇高で、荒れくるう嵐の叙述やミルトンによる地獄の描写は、喜悦を掻きたてるものの、恐怖をともなっている。これに対して、花咲く草むら、蛇行する小川が流れ、放牧された羊が群れた谷の眺望、楽園エーリュシオンの叙述やホメーロスによるウェヌスの腰帯の描写も心地よい感覚を掻きたてるとはいえ、それらは陽気で微笑を浮かべている。前者の印象が私たちにそれなりの強度を生じさせるためには、私たちは崇高の感情を持たなければならないし、後者をまっとうに享受するためには、美に対する感情を持たなければならない。(2: 208)

ここに提示された美と崇高の区別は、私たちにとってもそれほど問題なく理解できるものだろう。つぎに『純粋理性批判』、『実践理性批判』と並んで「三批判書」と呼ばれる 1790 年に刊行された『判断力批判』を見てみよう。

同書の遺稿として残された当初の序論（いわゆる「第一序論」）には、「心の能力」が（1）「認識能力」として「自然」の「合法則性」を原理とする「悟性」、(2)「快不快の感情」として「技術」の「合目的性」を原理とする「判断力」、(3)「欲求能力」として「倫理」の「責務」を原理とする「理性」に分けられるという展望が語られており（20: 245–246)、(1）が『純粋理性批判』の、(2）が『判断力批判』の、(3）が『実践理性批判』の課題に該当することは明らかだ。

しかし『純粋理性批判』が自然を対象とすると言っても、それは物理的な、つまり機械的な自然法則の世界にほかならず、『判断力批判』はそれとは異なる自然を、つまり有機的自然の世界を対象としている。『判断力批判』の前半では美、崇高、天才などについての議論が展開され、美学的内容を示しているが、その中心にあるのは自然美の問題だ。それに対して後半では有機体

（組織的生命体）に関する議論が展開され、一見すると前半と後半のつながりがわからないけれども、後半の議論は「自然目的」としての生命体がテーマだから、『判断力批判』とは「有機的自然」の「技術」に似た能力を焦点とした書物ということになる。

実際のところカントは『判断力批判』で、「自立的な自然美は、私たちに自然の技術を開示する」（5: 246）、「芸術とは、同時に自然のように見える技術である」（5: 306）、「芸術は天才の技術である」（5: 307）といった「技術」に関するいくつものテーゼを展開している。「自然目的としての物とは、有機的に構成された存在者である」（5: 372）とされ、「有機的に構成され、そしてみずからを有機的に構成する存在者」（5: 374）は「技術の類比物」と位置づけられる。

カントは「趣味判断は感性的なものである」と論じ、その判断力を「感性的判断力」と呼ぶ（5: 203）。かつての美と崇高を対比する立場は維持されつつも発展し、つぎのような見解が語られる。

> 美と崇高のあいだには顕著な差異も目立っている。自然の美しいものは対象の形式に関わっていて、その形式は限界を設定されていることに本質がある。それに対して、崇高なものは、無形式の対象にも見いだされ、それはその対象のもとで、あるいはその対象をきっかけとして限界を設定されていないことが表象され、しかも限界のなさの総体が対象に結びついている。（5: 244）

美と崇高とは形式性を特徴とするものとして整理されなおしたのだった。カントは「美には 2 種類がある」という見取り図を提示し、花、オウム、ハチドリ、ゴクラクチョウなどの美しい鳥、アラベスク模様、テーマや歌詞を欠いた音楽などを「なんらかの規定された概念の条件」から解放された「自然美」だと、逆に男女の美、馬の美、建築物の美などは、「その事物が何であるか」という概念によって条件づけられた「付属美」だと主張する（5: 229）。ここから、カントが芸術美の多くを副次的な美として自然美ほど評価していないことが察せられる。事実としてボロウスキーは、カントの芸術的不能ぶりについて、つぎのように報告した。

> 絵画や銅版画は、どんなにすぐれたものでも彼は格別注意を払わなかったようである。彼がどこかで、たとえば広間や部屋の中で、一般から称賛され嘆賞されているそうした収集品を前にしたときでも、彼が特にそれに眼をつけ、またはその芸術家の技量について、何かの点で卓抜な鑑識眼を示したというようなことを、私はいまだかつて見たことがない。彼の居室に掛かっていたジャン・ジャック・ルソーの銅版画のほかには、家中を捜してもこの種のものは全くなかった。（ボロウスキーほか 1967: 82）。

そのような事情もあって、カントが芸術の多様性にではなく「じぶん自身を有機的に組成するする存在者」（5: 374）としての生命体に主要な関心を向けたことは理解しやすいことだ。なによりカントは『天界の一般自然史とその理論』でも地球外生命体について、想像をたくましくして

いたし、地球人はそれらの「理性的存在者」の一員として尊重されるものなのだった。カントは『判断力批判』でも人間存在に対する礼賛を発する。

> 悟性を有し、みずからに自由に目的を設定する能力を持つ地球上の唯一の存在として、人間が自然の主人と名づけられているのはたしかなことだし、自然を目的論的体系と見るならば、人間はその使命に依拠して自然の最終目的なのだ。(5: 431)。

こうして人間は人間にとって目的でないといけないと命じる『実践理性批判』と、人間は自然の最終目的だと指摘する『判断力批判』が連絡する。この完結性は「自閉度」の現れと見ることも、純粋な論理的強度と見ることもできる。それにしても、芸術美を不当に評価しないところは、あの度を超えたビール嫌悪を連想させるが、これらが「自閉的傾向」の問題と言えるのか、それともありきたりの「選好性」(好み)の問題なのかについて、結論を出すのは難しい。

7. 世界市民

東プロイセンのモールンゲン(現在はポーランドのモロンク)に生まれたヘルダーは1761年、18歳でケーニヒスベルクに到着し、38歳の私講師カントの教えを受けた。この時期のカントは『天界の一般自然史とその理論』の刊行から6年後、『形而上学の夢から見た視霊者の夢』を刊行する5年前にあって、批判期に入るのはずっと未来のことだった。カントの精神は、例の「独断のまどろみ」のうちにあった。だがヘルダーはそのカントに魅せられる。まだ節度を知らない恐れ知らずな議論の調子に感銘を受けたのだ。ヘルダーがフランスのストラスブール(ドイツ語名はシュトラースブルク)でゲーテと出会い、ドイツ近代文学の黄金時代の扉となった「シュトゥルム・ウント・ドラング」運動を始めるのは、それから10年後、1771年のことだ。

ヘルダーはゲーテらとともにヴァイマルに居住し、1784年から1791年にかけて、大著『人類歴史哲学考』を刊行した。同書は未完に終わったものの、人類の歴史の発展過程とは神によって地球に与えられた「人間性」の展開なのだという議論は充分に展開された。ヘルダーは文化ごとに有機的な構造があるという相対史観を提出して、従来ヨーロッパで一般的だった普遍史観に対する挑戦を試みた。批判期に入っていたカントは、1785年に『J. G. ヘルダーの『人類歴史哲学考』(第1部、第2部についての論評」を発表し、かつての弟子の書物を厳しく批判する。カントによるヘルダーの議論の要約の一部を見てみよう。

> 私たちの思惟と力とはあきらかに私たちの地球の有機構成からのみ芽生えてくるもので、私たちのこの創造行為が与えられる純粋さと繊細さに達するまで、みずからを変化させ、変転しようと努めているからだ。もし類比が私たちの案内役になるとすれば、別の星でも異なら

ないだろうから、人類は別の星の住人たちとひとつの目標を持っているのであり、最終的に複数の星への旅を始めるだけでなく、ひょっとしたら非常に多くのさまざまな姉妹世界のすべての成熟した被造物と交際することになるだろう。(8: 46)

ヘルダーは実際にカントが要約したとおりに書いている(Herder 1784: 8–14)。しかもヘルダーはこの書物の第 1 巻でじぶんの議論の参照元のひとりとして、名だたる天文学者とともにカントの名をあげている (Herder 1784: 10)。つまりヘルダーが『人類歴史哲学考』で展開した思想とは、カントによる『天界の一般自然史とその理論』を改めて独自に発展させたものだった。だが批判期に入っていたカントは、ヘルダーの議論が野放図に見えて、我慢できなかったらしい。ヘルダーが提示した死後世界の超天体的交流というイメージは、そもそもカントの創案を改訂したものだが、批判期を迎えたカントは、前述したように、不死性の問題が「構成的」にではなく「統制的」にしか把握できないと考えている。ヘルダーはその点でカントの批判哲学にとって（前批判期のカントと同様に)決定的なタブーを犯してしまっていた。そこでカントはつぎのように評価する。

この試みはたしかに大胆だが、しかし私たちの理性の探究心にとって自然なもので、不充分な議論がなされているとしても、不名誉とは言えない。しかし、それだけにいっそう望まれるのは、私たちの才知にあふれた著者が続編でしっかりとした地盤を発見して、彼の活発な天才性にいくばくかの制約を施すことだ。(8: 55)

つまりカントはヘルダーにもっと落ちつけと冷水を浴びせたのだった。以降、ヘルダーはカントに対して恨みを募らせ、「元弟子」から憎悪に満ちた「敵」へと変貌していった。カントとヘルダーのあいだには、おそらく「想像力」の位置づけの違いも横たわっていただろう。ヘルダーは天才性の根拠として想像力を礼賛し、それが「シュトゥルム・ウント・ドラング」の理念と化した。だがカントは「純粋理性批判」で想像力（Einbildungskraft ＝構想力）の能力を限定的にのみ理解していたし、ヘルダーに対する論評で「形而上学をつうじても感情をつうじても羽ばたいていく想像力ではなくて、設計においては広範にわたるが、実行に置いては慎重な理性によって」研究を進めて欲しいと依頼している（8: 55)。1798 年の『実用的見地における人間学』では、想像力に対して、つぎのような留保がなされることになった。

よく人が口にする想像力は、それほど創造的なものではない。私たちは理性的存在者にふさわしい形態として、人間の姿以外のものを考えることができない。だから彫刻家や画家は、天使や神を制作するときには、いつでも人間の姿を選ぶのだ。理性的存在者を構築する上で、人間から外れた形状（翼、鉤爪、蹄）を含みこむことは、じぶんの理念にそぐわないからだ。(7: 178)

20 世紀のドイツの哲学者マルティン・ハイデガーは『カントと形而上学の問題』（1929 年）で、カントは『純粋理性批判』の初版では、構想力のことを「感性と悟性」を「可能的統一において根源的に媒介する自立的な根本能力」と位置づけていたが、第 2 版でその立場から後退したと論じているが（ハイデッガー 2003: 159–169）、カント解釈として特殊すぎるため、賛同することはできない。むしろ私たちは、カントの死後にヨーロッパやアメリカで栄えた地球外生命体に関する多様な想像力をカントが眺めることができていたならば、いったいどのような感想を述べただろうか、と妄想をはぐくんでおきたい。

いずれにしても、カントは『天界の一般自然史のその理論』で披露した地球外の太陽系の惑星に生命体がいるという考えを最後まで放棄しなかった。『実用的見地における人間学』には、「人類を地球以外の惑星に住む理性的生命体と比較し、それらを唯一の創造者から生みだされた無数の被造物として考えると、人類を人種と呼ぶこともできる」（7: 331）と記されていることからも、その点は疑えない。だがカントはその理念を実態としての「構成的原理」によってではなく、そのように想定できるだけの「統制的原理」として慎重に扱うように変化していた。

カントの歴史哲学も、そのような「統制的原理」のもとに紡がれる。それはあきらかに、ヘルダーの歴史哲学に対する対抗という様相を見せている。すでに『人類歴史哲学考』が刊行された 1784 年、カントは「世界市民的見地における普遍史の構想」を発表していた。そこには構成的原理と統制的原理の違いだけがあるのではない。ヘルダーが新しい相対史観を示したのに対し、カントは従来の普遍史観を提出する。

> 私たちは芸術や学問によって高度な文化状態へと耕され、さまざまな社会的礼儀や上品さに向けて負担を感じるほどに文明化されている。それでも、私たちがすでに道徳化されていると考えるには、まだ非常に多くのものが足りない。（8: 26）

カントの普遍史とは、人間社会の道徳化の過程にほかならない。同年に発表された「啓蒙とは何か？　という問題への回答」で、カントは「啓蒙」に関する有名な定義を発表した。

> 啓蒙とは、人間がみずからそうであるという責任を有する未成年状態から抜けだすことだ。未成年状態とは、他人の指導がないとじぶんの知性を用いる能力がないことだ。この未成年状態の原因が知性の欠如にではなく、他人の指導なくじぶんの知性を用いる決心と勇気にあるのならば、未成年状態はじぶんの責任ということになる。したがって啓蒙の標語は「賢くあれ！」「じぶん自身の知性を用いる勇気を持て！」である。（8: 35）

この文章の場合、「啓蒙」は「啓発」のニュアンスを多く含んでいる。また、ここで「知性」と訳した語は、例の「悟性」のことだ。カントは「もしも「私たちはいま啓蒙された時代に生きているのか？」と問われれば、答えは「いいや、しかしおそらく啓蒙中の時代にいるのだ」とい

うことになる」(8: 40) と語る。すでに「非社交的社交」に関するカントの見解に即して指摘したように、カントは人類の歴史を、自然が人間たちに私たちの自然的素質を実現させ、文化を形成させる歩みと見なす。『実用的見地における人間学』には、つぎのようにある。

> 人間は文化を通して自分に学業生活を送らせるものだが、その文化のあらゆる進歩には、得られた知識や技術を世界のために用いるという目標がある。しかし、人間がそうするためのもっとも重要な対象とは、それも人間なのだ。人間とは人間固有の最終目標だからだ。(7: 119)

人間の目的は人間だというカントの実践哲学の命題が、それは歴史過程で実現するものだという歴史哲学の命題と融合している。さらに言えば、カントはそのような発展史観を政治的な議論を無視して「空中戦」として構築したわけではなかった。1795 年に発表された「永遠平和のために」は、カントの全著作中でもとくに知られたもののひとつだろう。フランス革命のさなかに、普仏戦争を終わらせたバーゼル条約に関して、カントはそれが真の平和条約ではないのではという疑念を抱いた。そこでカントは、例の「非社交的社交」に通じる議論を国家レベルに適用する。

> 永遠平和の保証（担保）になるものとは、大いなる芸術家としての自然にほからならない（つまり「諸物を操る自然」の観念）。自然の機械的進行からは眼に見えて合目的性が輝きあらわれており、その合目的性は人間の不和をつうじて、人間の意志に反しながら和合そのものを生まれさせているのだ。だからこの合目的性は、その作用法則に依拠すれば、私たちには未知の原因から出てくる強制があって、運命である。世界の進行過程における自然の合目的性を、人間の歴史の現実に即した究極目標をめざし、この世界的進行をあらかじめ定めている高次の原因と見なせば、摂理と呼ばれて良い。(8: 360–362)

カントは自然が展開して成就する普遍史には「運命」や「摂理」と見なされるものがあると主張し、永遠平和が夢物語でないことを示そうとする。その上で、「将来の戦争をまねく要素をひそかに宿して結ばれた平和条約は、だんじて平和条約と見なされるべきではない」(8: 343)、「常備軍は時をおいて全廃されるべきである」(8: 345)、「個々の国家における市民体制は共和的であるべきだ」(8: 349)、「国際法は、自由な諸国家の連合に基礎を置くべきである」(8: 354) など、現代の国際政治論で古典的命題となった有名なテーゼ群を提出し、論述していく。空理空論に見えるだろうか。しかしカントが提唱した国家連合は、国際連盟や国際連合としてまさしく実現したものだし、北体制条約機構や欧州連合などであっても、カントの理想に関係づけて論じることが不可能ではないはずだ。

しかし、と私たちは疑いたくなってしまう。そもそもカントのような普遍史観はそもそも現代人にとって納得のいくものなのだろうか。実際にはヘルダーの相対史観のほうが歴史哲学あるい

は歴史記述の方法として勝者の座を勝ちとったのではないか。おそらくそれは一定程度、正しい。正確には、現在では相対史観を含みこんだ普遍史観こそが、人類史を語る上での唯一妥当な様式だと広く認められている。だからカントの普遍史には脆弱性があることはあきらかだ。

たとえばカントの普遍史観の弱点は、文化人類学的知見を語るときに露見する。カントは1785年に発表した「人種概念の規定」で、「皮膚の色に即して、人間には四つの階級区分を想定することができる」と説明し、「白人」、「黄色インド人」、「黒人」、「赤銅色アメリカ人」の4種をあげる（8: 93）。カントはここで、一応は「私は人類に4つの人種を想定したが、それ以上の種族の痕跡がないと確信しているわけではない」と慎重に留保する（8: 100）。しかし1802年に刊行された講義録『自然地理学』では、つぎのようなあからさまな人種主義的偏見が記されている。

> 暑い土地では、人間はあらゆる部分で早熟だが、温帯の人々のような完全性に達することはない。人類がその最大の完全性に達するのは、白色人種においてである。黄色のインド人ですら、才能がより乏しい。黒人はずっと才能が劣り、もっとも劣っているのはアメリカ原住民の一部だ。（9: 316）

人間の知性は白人、黄色インド人、黒人、赤銅色アメリカ人と序列化されて説明されてしまう。これは『天界の一般自然史とその理論』で展開された太陽系レベルでの生命体の序列化を地球の内部に持ちこんだものにほかならない。あるいは、もともとそのような人種主義的偏見を抱いていたからこそ、太陽系の住民の序列化という想念を抱いた可能性も高い。同書では外見の美しさに関してもカントは際どい議論を展開する。

> ベンガルの子午線より東に位置する東方諸国の国民は、みんなカラムイク人の姿態を身につけている。この姿態は、最大級に発現した場合には、つぎのような性状を取る。顔の上半分は広くて、下半分は狭くて平たく、鼻はちっぽけで、眼はじつに小さくて、眉毛は非常に濃くて、頭髪は黒く、ヒゲの代わりにまばらなもみあげが生えていて、太ももが太くて短足だ。この姿態は東部タタール人、中国人、トンキン人、アラカン人、ペグー人、シャム人、日本人などにも共通しているが、にもかかわらず外見に恵まれた人もいることはいる。（9: 315）

いわゆるモンゴロイド（黄色人種）の外見的特徴がコーカソイド（白人）からの一方的な整理によって、おおむね醜いものとして片づけられている。それでも、私たちがカントを弁護することは不可能ではない。彼は地球の「永遠平和」を構想した哲学者だから、そのような人種的偏見があったとしても、ヨーロッパの政治的覇権を単純に肯定するような議論へと流れていかないことに注意を促したい。「永遠平和のために」で、カントはヨーロッパ人による植民地の圧迫と収奪を弾劾し、日本や中国が鎖国体制を取ってヨーロッパ人を排除したことを称賛している（8: 358–359）。カントは時代の制約を受け、ある程度の偏見に染まっていたとはいえ、世界市民とし

て筋を通した人物だった。

カントの人間観について惜しまれるところは、その世界市民としてのスケールの大きさを貶めるようなつまらない議論も折々披露されるところだろう。ヨーロッパでは古代から人間の気質や性格を 4 種類の体液に由来するものという議論がなされてきたが、カントもそれを継承していて、「調子乗りの多血質」、「陰キャの憂鬱質」、「情熱家の胆汁質」、「クールな粘液質」などについて論じている（7: 287–291）。カントの同時代にスイスの思想家ヨハン・カスパー・ラヴァーターが広めた「観相学」をわりと真に受けている点も惜しまれる（7: 297–302）。女性に関する議論に関しては、もちろん当時なりの多くの偏見が植わっている。キューンはカントが生涯独身だったとはいえ、性交の経験が皆無だったかどうかについては疑念を示しているものの、だからと言ってそれらしい証拠が発見されているわけでもない（グリーン 2017: 237–240）。とはいえカントの女性論は必ずしも平板なばかりではなく、女性を男性の支配者と見なすなど、社交を得意とした人物ならではの独自の見解も散見される。以下に引用する箇所は、フェミニズムを信奉する現代の女性が言ったと誰かから吹きこまれたとしても、うっかり信じてしまいそうになるものだろう。

> 自然は文化的でより繊細な感受性を、つまり社交と品行方正を注入したいと望むものなので、女性を男性の支配者にした。それは女性の礼儀正しさや、話ぶりや身ぶりの生き生きとしたさまをつうじてであった。また女性は早くから利口になることで、男性たちが彼女たちを優しく恭しく扱うようになるわけだが、結果として男性は生まれつき寛大なために、子どもの頃から見えない仕方でがんじがらめにされて、それによって道徳性そのものへと導かれることはないにせよ、道徳性を衣装のようにまとっている状態へと、つまり上品な礼儀作法を施せる状態へと導かれていて、これが道徳性へと導かれるための準備とも推薦状ともなるのだった。（7: 306）

カントの歴史哲学や世界市民としての言動の気高さ、および若干の至らなさを見ていくと、カントに自閉スペクトラム症的傾向があったかどうかは、もちろん判然としない部分が多いにせよ、しかし歴史を統制的に語るべきだとか、普遍史を無条件に肯定する点には「自閉度」が露出しているかもしれない。生涯未婚だったカントと同じく、自閉スペクトラム症者にも生涯独身の当事者は非常に多い。女性から相手にされにくいという事情もあるが、自閉スペクトラム症があるとアセクシャル（無性愛）の特性が併発することが多く、そうなると相手が男性でも女性でも恋愛感情や性的欲求を感じないため、ある意味ではパートナーを持ちたいという人類の（あるいは多くの生物の）強迫観念から解放されることになる。

8. 老耄の人

晩年のカントは、『自然科学の形而上学的始原から物理学への移行』を仮題とする著作の草稿を準備しつつ、完成を果たせないまま亡くなった。その草稿は13の束から構成される『オプス・ポストゥムム』(「遺稿」の意味)として残されたが、読んでみると認知症(かつての老人性痴呆症)の病後が容易に読みとれて、読者に不安を残す。たとえば第1束第17紙葉には、つぎのような一節がある。

> 電気が空中から私の神経系に作用し、地面に抜けていく。しかし私は猫の死の2年間(エアランゲン時代)に対する反革命を望む。(21: 89–90)

「エアランゲン時代」は、エアランゲン大学に招集された時期を、反革命はフランス革命に対するプロイセンの干渉戦争を意味するのだろうが、言葉の用い方が不自然で異様だ。全集の注釈によると、カントは晩年に頭部の圧迫を感じていて、それをかつてヨーロッパ中で猫などの生き物が大量に死んだ出来事と結びつけ、ともに空中の電気のせいだと考えていたらしい(22: 797)。ヤッハマンは『オプス・ポストゥムム』の時期のカントについて、つぎのように回顧している。

> そこでは個々の概念を深く考え通し、明快に叙述したけれども、しかしまたそれらはただ個々別々に連絡もなしに投げ出されているだけでありました。彼は幾枚もの全紙にいつも新しく書き始めては、またいつも元の同じ概念に帰ってきました。彼はもはや全体を包括し、個々の概念を体系的に秩序づける能力をもたなかったのです。あれほどの偉大な精神がこうして最後の力を示しているのを、そのままの形で眼のあたり見るのは、人間を知ろうとする者にとって興味深いことではないでしょうか。(ボロウスキーほか 1967: 153)

晩年には歯の衰えから、食事の際の行儀も、あまり良い印象を与えなくなっていたようだ。ヤッハマンの報告によると、カントは肉を齧って汁を吸うと、残りの身は皿に戻して、少しでも見苦しくないようにパンで覆っていたそうだ(ボロウスキーほか 1967: 221)。しかしヤッハマンはまた、カントが老いていきながらも、幼い子どもたちに優しく接することを忘れず、それが「はた目にもついうっとりするほど好感を与えた」こと、「かわいさのあまり、子供らしい話し方や冗談を言おうと努力している様子を見るのはうれしいもの」だったことを伝えている(ボロウスキーほか 1967: 167)。「啓蒙とは何か?　という問題に対する回答」で「未成年状態」を抜けだせと激励したカントは、おそらく子ども嫌いだったのではという想像を招くはずだが、現実上のカントはそのような人物ではなかった。さらに言えば、カント自身が子どものような印象を与える人だったことをボロウスキーが指摘している。

カントは、われわれの見るように、決して自分の真価を誤認はせず、露骨な反抗は避け、他人が故意に無視するのは忍びないが、それでいて善意に満ち、少しも求めるところのないといった人であった。そうして多少とも人間の品位について理解する人なら、誰しも敬服せざるを得ないような性質、また大勢の人の中にいるときは愉快に語らせ、そのために人びとから慕われ、またすべての人びとを満足させるというような性質を多くそなえていた。私はよくカントを「幼児のごとき人」とよんだ。つい昨日もカントのことを話していて、思わず「幼児のごとき」という言葉が私の口からすべり出たことである。われわれの習慣をよく知っていた私の長年の友人シェフナーも叫んだ。「そうだ、そうだ。幼児のごときという言葉は、カントの全貌を言い表わしている。」（ボロウスキーほか 1967: 87）

ここに引用した記述の前半は、カントの人徳についての説明になっている。しかし、そのような人徳をよく表現しつつも、カントは幼児のような印象の人だったと回顧される。この幼児的印象は、はたして認知症に由来するものだったのだろうか。それとも生まれつきの自閉スペクトラム症的特性のためだったのだろうか。自閉スペクトラム症者は身体的にも精神的にも成熟してなお幼児のような印象を与えることが知られている。

9.「人間」の終焉と「超人」

1961 年、フランスの思想家ミシェル・フーコーは博士論文『狂気の歴史』の副論文として、カントの『実用的見地における人間学』のフランス語訳と解説を提出した。翻訳が 1963 年に刊行された一方で、解説は長くソルボンヌの図書館に保管されていたままになり、フーコーが亡くなってから 24 年後の 2008 年に、よくやく印刷され、フランス語訳の序文として公開された。

フーコーの考えでは、「人間とは何か」という問題を初めて本格的に問うたのが、まさにカントだった。しかもフーコーは、そのカント的な問題構成が 19 世紀末にドイツの思想家フリードリヒ・ニーチェによって終わったと見なす。ニーチェは「神の死」を伝えることで人間のあり方自体をも疑問に付し、「超人」の出現を予言した人だった。だからフーコーが上述の「解説」で、「神の死は人間の死において達成される」、「哲学という領域で「人間とは何か」という問題が辿った軌跡は、その質問を拒絶し、武装解除させる「超人」というひとつの応答のうちに完結する」（Foucault 2008: 78–79）と記したことは、けっして不思議なことではない。

またこの解説を読むと、フーコーが『言葉と物』（1966 年）の終盤で示した記述も、かなり理解しやすいものになる。フーコーは同書で「私たちの近代性の入り口は、人々が人間の研究に客観的なもろもろの方法を適用したいと思った瞬間にではなく、「人間」と呼ばれる経験的かつ超越論的な二重体が構築された日に位置している」（Foucault 1966: 329–330）と主張していた。つまり人間がふたつの世界に同時に属している二重体だと説明したカント哲学によって、まさに近

代的な人間像が確立したとフーコーは主張したわけだ。それゆえにフーコーは同書の末尾で、「とにかくひとつ確かなことは、人間とは人間の知に関する文化のなかで、最古の問題でも、もっとも恒常的な問題でもないということだ」、「人間とは、私たちの思想の考古学によって、それは最近のものだという日付をたやすく示すひとつの発明品なのだ。そしてもしかすると、終焉は迫っている」と書きつらねる（Foucault 1966: 398）。フーコーは同書を予言的に締めくくる。

> もしこれらの全体性が、現れたときと同じように消えつつあるのだとしたら、なんらかの出来事があるとして、私たちはそれが起こる可能性をせいぜい予測できるだけで、さしあたってはその外形も知られず、必ず起こると約束されてもいないのだが、その出来事によって、18 世紀の古典主義思想の地盤がそうなったように転覆が発生するならば、そのときには賭けても良いが、人間は波打ち際で砂に描かれた顔のように、消えさってしまうだろう。（Foucault 1966: 398）

そのようにフーコーは、現行の人間に対する全体的なイメージが消滅するときは迫っていると託宣をくだした。

それから 30 年以上が経って、20 世紀の終わりが近づいた頃には、世界各地で終末論がはびこっていた。フランスの作家ミシェル・ウェルベックが 1998 年に刊行した小説『素粒子』では、人間の手によって 2029 年に人間の似姿として人工生命体が創出され、それから半世紀が経って、その人工生命体が繁栄する一方で、本来の人間は滅亡に瀕しているという物語が示された。この書物がフーコーの予言を意識していることは、誰にでも洞察できる。だから、ほかのフランス現代思想の論者たちと並んでフーコーの名も言及された上で、新しい人間を創出するためのスローガンは「変化は精神的ではなく、遺伝子的なものだろう」だったと語られる（ウエルベック 2001: 345–346）。小説は、「本書は人間に捧げられる」と記されて終わるが（ウエルベック 2001: 348）、これは『言葉と物』の最終部分へのオマージュだろう。

実際のところ、カントが想定したような人間のイメージの行く末は、どうなったのだろうか。筆者としては、スマートフォンが普及を始めた 2010 年代は、もしかすると「新しい人間」が確立した時代ではないかと思っている。20 世紀末に急激に発達したインターネット技術と携帯電話技術が結びつき、膨大な量の情報に地球上の多くの場所から移動しながらアクセスできるようになった。ここには現実上で従来の人間として暮らしながらも、その生活時間を大幅に仮想現実へと埋めこませているという新しい形態の「二重体」が出現している。その意味で私たちはすでに「超人」へと進化を終えてしまったのかもしれない。

自閉スペクトラム症の問題に絡めれば、このインターネットや携帯電話やスマートフォンなどの技術が急速に進展する時代のうちで、「脳の多様性」（ニューロダイバーシティ）という言葉が広まっていったことに注目しておきたい。全人類が「脳の多様性」のうちにあり、自閉スペクトラム症者は「脳の少数派」（ニューロマイノリティ）として、「脳の多数派」（ニューロマジョリティ）

にあたる定型発達者とは異なる体験世界を生きているのだという考え方が普及しつつある。将来の世界で、自閉スペクトラム症が病理的な問題構成から解放されたならば、私たち人類はさらなる「新しい人間」の段階へと踏みいることになるのではないか。

文献

カントの著作からの引用は、プロイセン・アカデミー版カント全集（Immanuel Kant, *Gesammelte Schriften.* Hrsg. von der Preussischen Akademie der Wissenschaften, Berlin, 1900ff, bisher 29 Bände, Reimer, ab 1922 de Gruyter）にもとづく。巻数とページ数を組みあわせて出典を示す。ただし『純粋理性批判』に関しては、慣例に従って初版を A ＋ページ数で、第 2 版を B ＋ページ数で示す。

ウエルベック、ミシェル『素粒子』、野崎歓（訳）、筑摩書房、2001 年
キューン、マンフレッド『カント伝』、菅沢龍文／中澤武／山根雄一郎（訳）、春風社、2017 年
坂部恵『理性の不安――カント哲学の生成と構造』、勁草書房、1976 年
高木裕貴『カントの道徳的人間学――性格と社交の倫理学』、京都大学学術出版会、2023 年
寺中平治「構成的／統制的」、有福孝岳／坂部恵（編集顧問）『カント事典』縮刷版、弘文堂、2014 年、168 頁
ドゥルーズ、ジル『カントの批判哲学』、國分功一郎（訳）、ちくま学芸文庫、2008 年
冨田恭彦『カント哲学の奇妙な歪み――『純粋理性批判』を読む』、岩波現代全書、2017 年
中川久定『甦るルソー――深層の読解』、岩波書店、1983 年
ハイデッガー、マルティン『カントと形而上学の問題』、門脇卓爾／ハルトムート・ブフナー（訳）、創文社、2003 年
帚木蓬生『ネガティブ・ケイパビリティ――答えの出ない事態に耐える力』、朝日新聞出版 、2017 年
ヒューム、デイヴィッド『人間本性論』第 1 巻（知性について）、木曾好能（訳）、法政大学出版局、2019 年
藤井基貴「ケーニヒスベルク大学哲学部とカントの大学論」、『名古屋大学史紀要』11 号、2003 年、1–25 頁
フォントネル、ベルナール・ル・ボヴィエ・ド『世界の複数性についての対話』、赤木昭三（訳）、工作舎、1992 年
ボロウスキー／ヤッハマン／ ヴァジャンスキー『カント――その人と生涯 : 三人の弟子の記録』、芝烝（訳）、創元社、1967 年
松山壽一『ニュートンからカントへ――力と物質の概念史』、晃洋書房、2004 年

ラヴジョイ、アーサー・O『存在の大いなる連鎖』、内藤健二（訳）、晶文社、1975 年

American Psychiatric Association（編）『DSM-5-TR　精神疾患の診断・統計マニュアル』、日本精神神経学会（日本語版用語監修）、高橋三郎／大野裕（監訳）、医学書院、2023 年　※典拠表示は APA

Foucault, Michel, *Les mots et les choses. Une archéologie des sciences humaines.* Paris（Gallimard）, 1966

Herder, Johann Gottfried von, *Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit.* Bd. 1. Riga / Leipzig（Johann Friedrich Hartknoch）, 1784

Kant, Emmanuel, *Anthropologie d'un point de vue pragmatique.* Traduction par Michel Foucault, présentation par D. Defert, Fr. Ewald, F. Gros. Paris（J. Vrin）, 2008

Rumore, Paola, “Empirical Psychology,” *Handbuch Christian Wolff.* Hrsg. von Robert Theis und Alexander Aichele. Wiesbaden（Springer）, 2018, S. 175–196

（謝辞）本論文は JSPS 科研費 JP23K00460 の助成を受けている。

（2023 年 10 月 2 日受理）

（よこみち　まこと　文学部欧米言語文化学科・准教授）